

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成23年12月号

平成二十三年十二月一日発行 第二十一卷第十二号  
平成二十三年九月十八日第三種郵便物認可  
通巻第二四六号（毎月一回一日発行）



# 三途の川

高橋将夫

竿灯の傾く方へ半歩かな  
桔梗にある冷たさとやさしさと  
実り田の横にやすらぐ刈田かな  
風の萩心のゆらぎにはあらず

通草の実舌で掬うて紅葉忌

古酒酌んで孤高の人となつてゐる

新酒酌む何をやつても駄目なとき

鱚雲千畳の間に敷けるほど

富士山の上から釣瓶落しかな

大宇宙大文字銀河字地球

天の川三途の川に合流す

# 槐安集

水野恒彦

みせばやを後手にして嘯きぬ  
心電図の波長の狂ひ真葛原  
父の背せなより見上げたる銀河かな  
穴惑ひ声もたてずに嗤ひけり  
流星や地軸のわれの傾ける

延広禎一

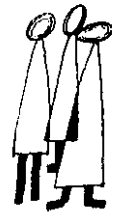
鬼灯の網目浮き立つ省二ノ忌  
立ち泳ぐ太刀魚の影卒塔婆かな  
風穴より遊女の声よ世阿弥ノ忌  
船霊はをみなの髪ぞ雁渡し  
新豆腐は男前なり水ごころ

加藤みき

蛇穴に百花繚乱治まりて  
曼珠沙華ご先祖さまの喝喝と  
かむなびの森の果の種茄子  
秋の墓す早く水を渡りたる  
秋祭 雲つく男登場す

石脇みはる

白桃の籠さげて乗る始発かな  
水澄めり家の奥処にひとのこ糸  
朝冷や厨に白湯のたぎりゐる  
天の川深みにはまる心地あり  
はんなりと朱雀の庭の藤袴



中島陽華

頬摺りのみみず一匹洗堰  
遊行忌の鰻頭包む竹の皮  
芭蕉珠解く休日の製缶場  
瑠璃玉にテグス通して中の秋  
浮島の鍊金術師穴惑

栗栖恵通子

鴟高音をとことことん老いにけり  
赤のままをんなゆるゆる老いにけり  
つゆだくの親子并秋に入る  
凜々と考チネの声ある今日の月  
穴惑ひツボを探りつ針灸師

竹内悦子

秋雲や小魚ばかり泳ぎをる  
九蓋草縞目の瓶かみに吠えてをり  
日と月と松の襖絵鷹渡る  
触るなよ白桃は息ひそめをり  
川幅の片側に群れ花芒

大島翠木

花野とは命こまごま抱くところ  
転生は小鳥を思ふ曼珠沙華  
曼珠沙華しづまりかへる脳波かな  
虹の輪をお嫁に走る狐かな  
猫じやらしの光を蹴つて来る少女

雨村敏子

どしやぶりの追ひかけてくる蓮田かな  
尼連禪河苦瓜の種真つ赤なり  
尼連河ニ釈尊修行の地  
無花果や人生るる時潮寄する  
送り火の灰美しき形して  
空耳に金風のいろ見えにけり

本多俊子

秋雨の秘めし音する淡海かな  
夕光ゆうかげのほほをよぎりて鳩の湖  
はらかならの涙は白き虹となり  
桃吹くや夕日に風のねんごろに  
まどろみといふ力あり鳥わたる

小形さとる

ほほづきや我を罅すだまに幾いくばく鱧鱧  
鯖雲や尿いばりついでいの相聞歌  
露けしや此の世のものにふくらはぎ  
とよ爺もひとり賑はふ良夜かな  
黄菊白菊すこやかなるに仇役

近藤きくえ

さやけしや目を閉ぢ宇宙のこゑきかむ  
涼新た飛白の文字の氣迫かな  
掌てのひらに朝あさの光と烏瓜  
綿吹くや心まどかにすごしゐて  
白桃酒ふふむ面影星月夜

近藤喜子

思ふことあり一途なる虫の声  
髣多き脳の重たさ鶏頭花  
新あづき海の響きを箕にこぼす  
来世より現世を信ず濁り酒  
酒器になるつもりが花器に瓢かな

谷村幸子

かぶらずに古びし帽子酔芙蓉  
瓔珞のゆれて銀杏落ちる音  
色鳥のまこと童顔なりしかな  
朝夕に祈る平穩鶏頭花  
神の庭群れて咲きたる吾亦紅

瀬川公馨

妖怪のすつたもんだや夜の秋  
月の夜兔が仙薬つくるらし  
天児の秋天しかと掴みたる  
石の上が立待月を食らひける  
爪紅をひつぱがしたる秋海棠

久保東海司

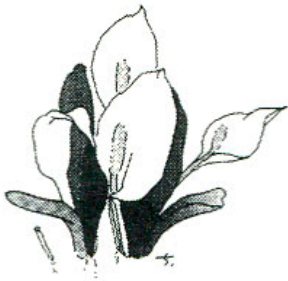
喪疲れの帯解くと落つ秋扇  
夕映えの艶もつ芒供華とせり  
汗の引くまでは話の外にをり  
大文字一劃づつの炎上す  
声掛けて言葉散りじり滝の前

西村純太

まんだらの佛の百態いわし雲  
かにかくに秋の七草飾りける  
夢なれど鹹湖に泛ぶ曼珠沙華  
ながれゆく芦刈舟の影溶けて  
前生さきしじょうの不可思議にゐて無月かな

中野京子

三日月の雲切つてゆく行方かな  
水澄みて空の明暗うつしをり  
かまきりの祈りのなりに餌をとらへ  
天高く見えない窓も開けてをる  
白雲の台座となりし良夜かな





# 槐市集

熊川 暁子

天網に逆だつ鱗雲の数  
庭下駄のす足の掴む今朝の秋  
長月の涼しむ処松しづく  
木耳にすぐに聞かれてしまひけり  
かななぎの素顔すがしや薄もみぢ

桑原 逸子

豊の秋錦の皿を賜はりぬ  
世の中は男と女 賜高音  
乗鞍へ六根清浄茸狩  
さびしさに見上ぐ甲斐駒銀河濃し  
はらからの恙を聞くや秋桜

近藤 公子

秋水に六字名号流れをる  
良寛も芭蕉も秋の風の中  
秋夕焼傷つきし手にやはらかし  
蔓引きて交信したる烏瓜  
満月を一人占めして石の上

近藤 紀子

朝なさな凌霄の花掃き集む  
人聲や青田の向かうの青田より  
盆の窪に今年の野分がわつと来し  
秋の蚊を討ち損じたる二刀流  
蠟燭の高野晩夏の闇照らす



# 槐集

## 高橋将夫選

貯水池に水満ち足りし良夜かな  
岡崎 岩月優美子

風に揺るる魂あまた曼珠沙華  
其処だけが暮れ淀みをり葉鶏頭

紆余曲折その先にある花野かな  
いにしへの風音を聞く真葛原

胎蔵界金剛界と穴惑ひ  
守口 柳川 晋

正体を見られわれから粉粉に

曼荼羅も案山子もつくりて毀つもの  
思ひ切り空つぽになる添水かな

真夜中の太陽に向け蚪鳴く  
堂島の灯を沈めぬる水の秋  
枚方 熊川暁子

ボンゴレを巻いて白露の日と思ふ

落蟬の草葬となる風のなか  
ひぐらしや鉄輪の事をくりかへし

言祝の色に実りし今年米

実石榴や安達ヶ原のされこうべ  
撰津 中田 禎子

赤とんぼ漢の恋ふる子守歌  
見えぬ人をりてとぎれし踊の輪

はんざぎや工房の藍匂ひ立つ  
大海へ向うてゆきし草の絮

重陽の雨に浮き出る胸の染み  
京都 竹中 一花

酒強きをんな大見得月夜茸

紙燭の灯点るや色無き風湧けり  
大いなる乳房や秋に子は三人

草虱持てば泣き止む子の黒子  
紅芙蓉劇中劇に酔うてゐる  
岡崎 寺田すず江

無花果の熟れて安堵の眠りかな

煩惱を抱へすぎたり赤棟蛇  
点と線孤独なりけり吾亦紅

月の船蒼き宇宙に漕ぎ出しぬ

# 銀河往来

高橋将夫

大海へ向うてゆきし草の絮 中田 禎子  
草の絮が大胆にも大海の方へ飛んで行く。しかし、そこにへ海  
に出て木枯帰るところなし 誓子」のような悲壯感はない。

## ◇「槐集」 観照

いにしへの風音を聞く真葛原 岩月優美子  
葛は万葉のころから風にそよぐ葉が多く詠みつがれ、花が注  
目されるようになったのは現代俳句になってからといわれる。  
作者が真葛原に吹く風にいにしえの頃を思い浮かべたのも大い  
にうなずけるところである。

〈貯水池に水満ち足りし良夜かな 優美子〉は満水の貯水池  
から良夜の趣がよく伝わってくる。

思ひ切り空つぽになる添水かな 柳川 晋  
溜まった水の重みで竹筒が反転し、石などに当たって心地よ  
い音をたてる。この時、竹筒にたまった水は全て流れ出て、空つ  
ぽになる。添水の音の根本にある水の動きに着眼したのが手柄。  
力を出し切って空つぽになるあたりに、もの、この本質を感  
じさせられる。

落蟬の草葬となる風のなか 熊川 暁子  
蟬がやわらかな草に落ち、やすらかに死を迎えた景。火葬、  
土葬、風葬、鳥葬など、埋葬にはいろいろあるが、草葬という  
発想に作者のやさしさを見た思いがする。

大いなる乳房や秋に子は三人 竹中 一花  
三人の子の母となる女性。「大いなる乳房」に母の強さが感  
じられる。食欲の秋。母のたくましさを感じさせる。

点と線 孤独なりけり吾亦紅 寺田すず江  
吾亦紅の細く真つ直ぐな茎と小さな花を即物的に表現した  
「点と線」と「孤独なり」の主情的な表現のコントラストに感  
動させられた。

名月に心の影も動きゆく 犬塚 芳子  
静かに西の空へと移っていく名月を見ていると、「心の影も  
動く」という作者の心境がわかってくる気がする。

山の風海の風道秋 遍路 岩下 芳子  
山を越えてくる風、海を渡ってくる風。その長い道程に遍路  
の長い道のりが重なる。

さびしさは白水引の花盛り 近藤 紀子  
白い水引の花ゆえに、その花盛りは淋しさの極みだという。  
繊細な感性の一句。(以下略)